私の名前は水姫さやか。
先日○5歳になったばかりの○学三年生です。
見ての通り真面目なタイプで、視力も悪く分厚いメガネをしてますし、
制服も校則違反にならないよう、充分な長さのスカートを着用しています。
勿論、可愛い恰好をしている同級生に憧れは無いとは言いません。
ですが、元々地味な私が、そんな世界に憧れた所で意味が無いので、
自分の得意分野である勉強で成果を出したいと思い頑張っています。
【友達】「さやか、おはよう〜！今日もクソ真面目な恰好してるね」
【さやか】「おはよう。ほっといて、私はどうせ地味だからこれでいいの」
【友達】「さやかは素材いいから、メガネやめて髪型と制服変えたら絶対可愛いよ？
ほら、私みたいにミニスカートにして、コンタクトにして、髪型も…」
【さやか】「絶対やらないから。それよりも、今日の中間テストは大丈夫なの？」
私は友達といつも通りの他愛ない会話をしつつ、学校へと向かいました。

【さやか】「ふぅ…これで中間テストも全部終わったね、どうだった？」
【友達】「まったく勉強してなかったけど、さやかに出題傾向教えて貰えて助かったよ！」
【さやか】「…それは何よりだけど、これに懲りたら、次からはちゃんと勉強しなきゃね」
模試も終わり、私は友達といつも通りの他愛のない会話をしていると、
友達が私に何か紙袋を差し出しました。
【友達】「はい、これお礼。いつも勉強教えて貰ってるから」
【さやか】「なにこれ？　制服みたいだけど」
【友達】「うん、お古で申し訳ないけど、私の制服。さやかに似合うかなって」
【さやか】「だから、そんな短いスカートの制服なんていらないから」
【友達】「そんな事言わずに、試しに着てみようよ！　絶対似合うから！」
私の意見をカチ無視して、友達は私に制服一式を押し付けてきました。

そのまま私は、友達が所属してる部活の部室へと連れ込まれてしまいました。
【友達】「にひひっ、それじゃお着換えしましょうか～」
【さやか】「こ、こらっ…学校でそんな恰好に着替えさせるなんてっ…」
【友達】「いいからいいから」
友達はノリノリで私を着替えさせていきます。
私は迷惑そうなそぶりをしましたが、友達が世話を焼いてくれるのは嫌いではありませんし、自分が普段やらない恰好にも、少し興味があったりします。
【友達】「じゃまずは、そのクソダサメガネを取って、この前一緒に作ったコンタクト入れて。そのダサいTシャツは脱いで～。ついでにカボチャみたいなパンツも脱いで～」
【さやか】「ひゃあっ！？　ぱ、パンツまで脱がさなくてもっ…！」
私は着せ替え人形のように、友達に制服を脱がされ、そして着替えさせられて行きました。

【友達】「最後に髪型を整えて…はい完成！　ほらかわいい！」
結局私は下着も靴下も全部着替えさせられ、髪をポニーテールにされ、大きなリボンまでつけられました。
スカートが短すぎて、ノーパンの股間がスースーして落ち着きません。
【さやか】「…まさか勉強教えてこんな目に合うなんて…」
【友達】「ほらほら、そんな事言わずに、鏡を見てみなって。マジでかわいいから！」
【さやか】「全く…私がかわいいなんて事があるはずが…
ふえっ！？　こ、これが私！？　う、嘘…」
友達はそう言って、ロッカーの奥から大きな鏡を取り出し私の前に立てると、
そこにはいつもの私とはあまりにも違う姿の私が映し出され、私は思わず固まってしまいました。
そして自分を見つめてドキドキしている私を見て、友達は面白そうにニヤニヤしてました。

【友達】「よかった、気に入ってもらえたようで何より♪」
【さやか】「だ、誰が…いや、確かに可愛い恰好だと思うけど私には似合わないし…
それにこんな短いスカート、校則違反なんじゃ…」
私がそう言うと、友達はニヤニヤして近づき、
私のスカートを思い切りまくりあげました。
【さやか】「えっ？　きゃあっ！？」
【友達】「確かに、下着が見える長さのスカートは校則で禁止されてるけど、
ノーパンなんだから下着は見えないし、校則違反じゃないから大丈夫大丈夫」
【さやか】「そ、そんな屁理屈っ…！」
そして私が慌ててスカートを抑えたタイミングで、部室の扉が開き、下級生たちが入ってきました。

【部員】「こんにちわ～。　あれ？　先輩、その人は…？」
【友達】「うん、私の友達で、ちょっと用事があって来てもらったんだ」
【部員】「先輩のお友達でしたか、こんにちわ～！　先輩のお友達にこんな綺麗な人がいるなんて！」
【部員】「本当に可愛い…ポニーテールと大きなリボンも、チェックのミニスカも可愛い…いいなぁ…」

下級生に囲まれて困る私に、友達は助け船を出しました。

【友達】「ほらほら、私の友達を囲んで困らせない。　それより早く着替えて練習！」
【部員】「はぁ～い！」
【友達】「というわけで、ゴメンねさやか。　また部活が終わった後でね！」
【さやか】「えっ？　ちょ…まっ…！」

そして部員達が着替えを始める中、友達は私を部室から追い出してしまいました。
友達はそのまま部活に行ったため、私はこの恰好のまま、部活の終了を待たなければならなくなりました。

友達も部員も部室から出て行ってしまい、鍵がかかってしまったので、戻って着替えも出来ません。
この恰好で、ましてやノーパンで学校内をうろうろするのは不安で仕方がありませんが、
かといって部室の前でずっと待っているわけにも行きません。
とりあえず、教室で勉強でもして、部活の時間が終わるのを待とう。
私はそう考えて、恐る恐る廊下を歩いて、教室へと向かいました。

【男子】「…うおっ…あんな女子いたっけ…？」
【男子】「めちゃくちゃ可愛いんだけど…何年生なんだろう…」
【女子】「えっ？　うわっ、ホントに可愛い。　誰？　見た事ないんだけど…」

私が生徒たちとすれ違うたびに、そんな噂話が聞こえてきます。
いつもなら全く見向きもされないのい、ちょっと髪型と服装を変えるだけでこうなるとは。
嬉しいような、恥ずかしいような、なんだか悪い事をしている気分になりながら、教室へと入りました。

【さやか】「…やっと教室についた…まさかあんな反応をされるなんて…」
私が教室に入ると、何人かの男子が残っておしゃべりをしていました。
そしてその男子達は、私が教室に入ると目を丸くして私の方を見て、
びっくりしたかのように話しかけて来ました。
【男子】「…うおっ…君はどこのクラスの女子？　何か用？」
【さやか】「えっ！？　わ、私、水姫さやか…」
【男子】「ああ、水姫さんのお友達？　水姫さんなら友達に連れられていったけど…」
【さやか】「…えっ…わ、私は…」
同じクラスの男子ですら、私が水姫さやかだと気が付いていません。
この状態で私がさやかだと説明すると、面倒な事になるかもしれないと思い、私は教室を出ました。

私が教室を出た後、教室から男子達が騒ぐ声が聞こえてきたので、私は聞き耳を立てました。

【男子】「今の子、めちゃくちゃ可愛くなかったか？　水姫にあんな可愛い友達いたんだな～」

【男子】「水姫と全然違うタイプじゃん、水姫はクッソ地味で可愛げもないし」

【男子】「それなww　それにしても今の子可愛かったなぁ…スカートめっちゃ短いしやべえな」

【男子】「今度水姫に聞いてみようぜ」

【さやか】「…あいつら、人の事だと思って好き勝手言って…」

同じクラスで数か月も一緒に過ごしているのに、見た目を変えただけで分からなくなるとは。

それに、普段の私をクッソ地味だとかディスってくれるとは。

私は男子に対して怒りが沸いてきましたが、

それよりも、自分がそこまで別人のようになっているという事に心底驚き、

そして可愛いと言われる事に、ものすごい満足感を感じていました。

【さやか】「…あいつらの事は置いといて、もうちょっと校内を散歩してみようかな…」
私は身内以外から可愛いと言われた事が無いため、可愛いと言われる事がとても気分が良く、
そしてクラスメイトすら見分けが付かないほどに変身してしまったという事に、
高揚感すら感じていました。
【男子】「うわっ…あんな女子いたっけ…可愛い…」
【男子】「転校生か？　あんな美少女転校生とかロマンだなぁ」
【男子】「おい、今こっち見て笑ったぞ！　可愛いなぁ～」
男子達に美少女だと噂されたびに、私の承認欲求が満たされていくのを感じます。
友達がお洒落して街に出かけたくなる気持ちが、少し分かった気がします。
あまりに気分が良くて、鼓動が高鳴り頬が赤らみ、顔がにやけて笑みがこぼれてしまいます。

そんなチャホヤされる気分のよさに浸っていた時でした。
廊下の窓が開いている場所を横切った瞬間、風が吹き抜けスカートをめくり上げられてしまいました。
普段長いスカートを履いている私は、風でスカートがめくり上げられる事に慣れておらず、
がっつりとスカートをめくりあげられてから、自分がノーパンである事を思い出しました。
【さやか】「あっ……！　キャアッ！」
私は慌ててスカートを押さえましたが、もう後の祭りです。
【男子】「お！　パンツ見え…って、見えない！？」
【男子】「パンツはいてないっ！？　マジかよ！」
【男子】「あんなミニスカでノーパン…あんな美少女なのにやべぇ…」
私は真っ赤な顔でその場から逃げ出し、女子トイレの中に逃げ込んでいきました。

【さやか】「み、見られた…ノーパンのお尻、男子に…」
私はトイレの個室に入り鍵をかけ、見られた恥ずかしさで顔を真っ赤にしました。
しかも相手は女子ではなく男子で、学校でノーパンのお尻です。
【さやか】「これじゃ…完全に変態じゃない…
明日からどんな顔して過ごしたら…」
ただでさえ男子にお尻を見られて恥ずかしいのに、
この恰好に着替えて、周囲から注目を集めていたので、
恐らく私がノーパンだった話も、すぐに広まるかもしれません。
もしそんな話が広まって、水姫さやかはノーパンで出歩く変態だと
認識されたらどうなるか…さらに注目を集め、男子が私のスカートの中を覗き、
そしてお尻だけでなくオマンコまで見られるハメになる…そんな想像をしてしまいます。

しかし、私の危機感とは裏腹に、そんな想像をすればするほど、何故かドキドキしてしまいます。
そして下半身がうずき、オマンコの辺りがムズムズとしてきます。
私は何となく割れ目に指を伸ばしてみると、指先に粘液が付着しました。
【さやか】「…えっ？　なんで…どうして…
ここが湿ってるの…？」
私も健全な○学生ですから、興味本位でオナニーをした事はあり、これはその時と同じ状況だという事は理解できます。
つまり、私はこんなミニスカートでノーパンで出歩いて注目を集め、さらに男子にお尻を見られた事で、性的興奮を感じたという事です。
私自身にこんな性癖があったという事に驚きつつも、
それを自覚してしまった以上、もう自分自身の指を止める事は出来ませんでした。

【さやか】「んっ…あっ…♥　こ、声出しちゃダメッ…」
オマンコを開き、割れ目の内側をなぞるように指を添わせたり、クリトリスをゆっくりと愛撫すると、気持ちよさに思わず声が漏れてしまいます。
【さやか】「も、もし…お尻じゃなくて…オマンコを見られていたら…」
私が男子達に正面を向いていた時にスカートがめくれて、毛の生えていない割れ目を見られていたら…。
さらに言うなら、私のこの恰好がもっと有名になり、スカートがめくれたタイミングで写真撮影をされていたなら…。
そしてその写真を学校内にばらまかれてしまったら…。
そんな想像をすると、気持ちよくて指が止まりませんでした。

【さやか】「ひっ…♥　あっ…♥」
以前、興味本位でオナニーしてみた時は、まあ気持ちよかったかな程度でしたが、今日のオナニーの気持ちよさは別格で、頭がバカになりそうなレベルです。
【さやか】「学校でこんな事して…もしバレたら…」
私の妄想はどんどんエスカレートしていきます。
男子にバレて、脅迫されて、口止めとしてレイプされたら…。
そんな妄想をした直後、快楽の絶頂が私に押し寄せて来ました。
【さやか】「あっ！　ひいっっっ…！」
私はおしっこを漏らしながら、絶頂の気持ちよさで体を痙攣させてしまいました。

【さやか】「はぁっ…♥　はぁっ…♥」
自分がノーパンで出歩き、それがバレて変態扱いされ、脅迫されてレイプされる。
そんな妄想でオナニーし、生まれて初めての絶頂を経験しました。
【さやか】「…こ、こんなに気持ちいいなんて…
こんな事してちゃ、ダメなのに…」
私は真面目な性格であり、学校という勉強をする場で
オナニーしてしまった事の罪悪感もありましたが、
こんな恥ずかしい恰好で出歩く事に快楽を覚えてしまえば、
いつか取り返しが付かない事になるという危機感も覚えました。
本当に私が変態として認識され、本当にレイプされてしまったら…。
そこまで考えた所で、私はいくつかの事実に気が付きました。

【さやか】「…そっか…学校以外なら大丈夫かも…」
学校でこんな格好をして歩く事が危険なら、学校以外の場であればいいのではないか。
街に行ってもいいし、何ならネットで写真をアップする形でも問題ありません。
【さやか】「…それに、クラスメイトですら
私が水姫さやかだと気づかないんだし、
私がどんな恰好で街を歩いても、ネットに
写真出しても、誰も気づかないよね…」
絶頂の余韻も収まり、冷静になってきた頭で現状を分析すれば、
私本人とバレていないのだから、何の問題もない事に気が付きました。
むしろ、この恰好に着替えさえすれば、何をやっても実生活に影響がない。
私はその事実に気が付いて、思わず笑みを浮かべてしまいました。

【さやか】「…とりあえず着替える前に…」
私はスマホを操作し、とういったーというSNSのアカウントを作りました。
これでとりあえず、写真を撮影すればネットにアップする事が出来ます。
【さやか】「自撮り棒なんて持ってないし…
とりあえずはタイマーで…」
私はトイレの壁にスマホを置き、タイマーで撮影しました。
普段しないような笑顔とピースマークを向けた写真は、本当に
いつもの自分とは全然別人の可愛さで、我ながらドキドキします。
私はその写真をトリミングして、とういったーにアップロードします。
いくらいつもの自分とは違う可愛い外見になっているとはいえ、自分の写真を
ネット上にアップする事になるなんて…私はドキドキしながら、とういったーを見ました。

さやか@JC2年生 @sayakajc2

初めまして、さやかと申します。
都内の〇学校に通っています。〇〇です。
とぅいったーをはじめてみました。
写真などアップしたいと考えてます。
よろしくお願いします。

【さやか】「…うわ、本当に私の写真がアップロードされてる…」
自分でやっておいて、実際にこうやって自分の写真がネットにアップされるのを見るのは、何とも不思議な気分ですし、中々恥ずかしい感じすらあります。
そしてアップしてすぐに、私のスマホに通知が鳴り始めました。

【さやか】「うわ…凄い勢いでフォロー増えてる…」
フォローだけでなく、リトゥイートとお気に入りもみるみる増えていきます。
このままどこまで増えるのか、私がドキドキていると、友達から通話が飛んできました。

〇2　⇔14　♥31

【友達】「ごめんごめん、パンツ脱がした事忘れて部室から放りだして…。今どこにいる？」
【さやか】「もういいよ。校舎2階のトイレで隠れてるから、着替え持ってきて」
私がそう告げると、友達はものすごい勢いで走って、私の所にやってきました。
手には大きな紙袋を抱えており、私の着替え一式がそこに入っていました。

【さやか】「…こんな格好、生きた心地がしなかったよ…」
【友達】「部活中に、凄い可愛い子がノーパンだったって噂してる男子の話が耳に入ってね…。もしかしてさやかが！？　と思ったらいてもたっても居られなくて…ホントにゴメン！」
【さやか】「大丈夫、私は凄い可愛い子でも無ければ、男子にも見られてないから」
【友達】「いやぁ…さやかはこの学校でもトップクラスに可愛いと思うんだけどなぁ…」
平謝りする友達から制服を受け取り、私はトイレで着替えを終えて、家路へとつきました。